

---

# 帝国の聖騎士

忘れられた亡霊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

帝国の聖騎士

### 【Nコード】

N8852Q

### 【作者名】

忘れられた亡霊

### 【あらすじ】

大分裂戦争の真ただ中、英雄と称された『紅き翼』と何度も刃を交えた

人物をいた。その者の名は、ライナ、『ヘラス帝国騎士団主席総長』

## 1：屍山血河

死山血河の中、一人の青年は涙を流していた。

曇り一つ無い白銀の鎧兜の隙間からは涙を流し、垂れ下がっている右手には赤い血を帯びた剣が収まっている。

周りには、身体に剣や槍が突き刺さっている死体が無造作に転がっている

動かなくなつた体、胴体から切り離された頭や腕、足。

青年の着る鎧は至る所に帰り血を浴びている、長い時経っているのか鎧にへばり付いている血は乾燥していた。その血を青年は拭き取るうとは思わなかった。それは、死んでいった敵や部下への懺悔なのかもしれない

「この血なまぐさい戦争はいつ終わるのだろうか…」

青年の呟きには誰一人答える人はいない。

後ろには大勢な部下が並んでいたが彼の言葉には誰も答えない。

長い間、彼に付き添ってきた部下達は、知っていた。

平民や貴族からは、帝国最強と呼ばれていても実際には20歳にも至っていない子供だ。

部下や平民の前では堂々とした態度をとっているが、それは虚勢である。部下の騎士たちは知っていた。戦闘があった夜では天幕の中で死んだ部下に対して泣いている姿はよく見られていた。部下たち

は、そんなただの一部下のことまでも大切にする青年のことを心の底から信頼し、忠義を誓っていた。

昔は小さな小競り合いだったにも関わらず、今では全世界に広まってしまった。

それでも、青年は知っている。この戦争の帝国の真意を帝国の真の狙いは我ら古き民の文明発祥の聖地の『オスティアの奪還

そんな裏に暗躍している存在がいることもそれにともない小国では、内乱や紛争も起こっている

悲しみに浸っていれば、ガシャ、ガシャと足音を鳴らしながら後ろから部下が声を掛けてきた

「ナイトリーダー騎士団長、部隊の撤退の準備整いました。」

彼は、青年が騎士団長になる前から副師団長に着いて人だった。

「わかった。今行く……さあ、皆、凱旋だ。」

自分から後方に整列している部下達に声を掛ける青年の名は……

ライナ・シデス・ヒュラツセイン

ヘラス帝国騎士団長



## 2：騎士団

ライナは戦場の戦果を皇帝に報告していた。

武装を解除して謁見の間へ入る

四方がほぼガラス張りの、まるで水の中にいるような美しい部屋の中で皇帝は玉座に座っていた

クリムゾン・ヘアツオーク・ヘラス10世、ヘラス帝国の現皇帝  
立派な髭を生やした気のいい人である

脇には近衛兵二人、緑色をした軍服らしい服を着た恰幅のいい老人と青服を着たいかにも文官といった老人が目をこちらに向けていた

ライナは、皇帝の前まで進み膝をついた

「ライナ・シデス・ヒュラッセイン、ただいま『ニヤンドマ』遠征より帰還いたしました。」

「御苦労だった。ライナ、話は報告で聞いている。大活躍だったぞうだな。」

「ありがたき幸せ。」

皇帝の覇気の籠もった声に答えるライナ

その後も詳しい報告を終えたライナは謁見の間から出ていた

宮殿を出て、ライナは練兵場に向かっていた。  
練兵場とは、魔法ではなく、剣術、槍術、体術の訓練をする場所である。

帝国が持つ軍事力は主に帝国軍と帝国騎士団に分かれる、  
いわば帝国軍は一般兵、帝国騎士団はエリート兵なのである。  
とは言っても遠征に行く時は、帝国軍を指揮するのは帝国騎士団の師団長なのだ。

一か月近く遠征に出ていた、ライナは心配で部下の師団長の演習を見に来ていた

ズドオン！ズドオン！

あと少しで練兵場という時にライナは地響きを感じた  
しかも練兵場の方から

「あの二人か……」

少し早歩きになったライナは練兵場に向かっていった

練兵場

「おらおらおら~~~~！喰らえ！ラルゴ~~~~！いくぜえ！岩砕烈迅  
槍！~！」

「ちいいいいい~~~~！獅子、閃光！~！」

練兵場の構造は、コロシアムに似ており周りが客席に囲まれておりその中央に直径500の長方形の広場がある。理由はもともと此処が貴族の娯楽であった囚人を魔獣や竜族と戦わせる闘技場だったからだろう。

その中央で朱塗の大槍と漆黒の大鎌を構えた二人の男が刃を交えていた

客席では、二人の部下が大声をあげて応援している。

槍と鎌が交えるたび火花が散る。

神速と言っているような速さで槍を繰り出し自分の中で一番の貫通力をもつ技を、鎌を持つ巨漢はいなしながら口を開いた獅子のように見える気の塊が見える技を放つ

ぶつかりあった気は周りに衝撃波を生み出し大地が割れる

闘技場の客席の一番上

ライナに似ている鎧兜を被った少年と長い耳を持ちロングスカートの上からでもわかる抜群のプロモーションをもつ美女が二人の戦いを見ていた。

「アックアさんまた腕をあげたんじゃないですか？」

「そうですね。技の威力が上がっていました。」

少年の言葉に肯定する女性

「そういえば、今日兄上が帰還すると聞いたんですけど、マーテルさんは逢いに行かなくていいんですか？」

「もうすでにお会いになりましたよ。帝都に御帰還なさったときに最初に私のお部屋に来てくださいました。それにいらっしやいましたよライナが。」

二人の後ろの通路からライナが歩いてくるのに気がついた二人は後ろを向いた

「元気だったか？フレン？」

「はい。兄上も元気そうでしたです。」

ライナは、中央でいまだに打ち合っている二人に視線を向けた

「あの二人は相変わらずそうだな。」

「ええ、暇さえあれば打ち合っていますよ」

もう一度、打ち合っている二人に視線を流すといつの間にか打ち合いは終わっていたのか

アックアが自分より20？も高いラルゴの肩を叩いている

アックアは、入口にいるライナに気がつくくと大声をあげて叫んだ

「おっ！ライナじゃねえか！おっい、ライナ~~~~！」

その瞬間、客席にいた騎士団兵士は起立をし

『『『『』』』』お帰りなさいまし、騎士団長』ナイトリーダー『『『『』』』』

立ち上がる兵に着席を促しながらアッシュは、中央の二人に近づいていった

自分より頭一つ分や二つ分でかいアックアやラルゴを見上げながらライナは二カ月ぶりの再会を祝っていた。

「久しぶりだな、二人とも。元気そうじゃないか」

「そうだな。ライナが遠征に出かけるために帝都を出た時、俺達アリアドネー方面の遠征に出たからな。」

アックアがライナの背中を叩きながら答える

「まあいい。詳しい話はおいおい聞こ」  
「ライアイイイイナナナナ」  
「……ここであつたが百年　目……」  
「……はあ、またですか……」

練兵場の屋根200mに匹敵する高さから、甲高い声が聞こえてきた。

師団長や兵士も呆れながらも上を見上げる

正直いつてめっちゃ浮いている

金色の色をした髪はまとめるでもなく伸ばしているし、服装も、使

つている布は高価そうだが、  
だらしなく着崩していても気品があるとはいえない  
は確かにあるが  
威厳

「ピオニー様降りてきてくださいあぶないですよ……、へたしたら死んじゃいますよ」

「俺様は、こんなもんじゃ死な『ズルツ』ありゃ『ゴン！』ぐぼっ  
！」

力いっぱい踏み込んだが踏み外し下半身が屋根の場外へそして…後頭部を床に思いっきり叩きつけ  
その勢いで真つ逆さまで200m下の床まで落ちていく

ヒュウウウンンン……、ズドオン！！

「……（またか、またですか）……」

この男、ピオニー・ルグニア・ヘラス、これでもクリムゾン皇帝の正室の二人のうちの一人息子、いわば現在の帝位継承権第1位なのだ。

土煙が上がる中でピオニーは多少の擦り傷がしているだけでたちあがった

「いや、まいったまいった」

後ろから、クイーンオブオナー近衛侍女が走ってきた

「ピオニー様、執務室を抜け出すとはどういっおつもりですか？！」

「げ！、もう見つかった！じゃあな皆！さらば！」

クイーンオブオナー  
近衛侍女 が入ってきた反対側の入り口から出ていく次期皇帝を見送ってから

すこしたち、練兵場の兵士と師団長は一斉にため息をはいた。

「「「「「だめだ、あの人なんとかしないと」」」」」

民や一般兵からは憧れともいえる騎士団といえど日常はこんなもんだ。

## とある物語の登場人物

ライナ・シデス・ヒュラツセイイン

19歳・身長184cm クラス：魔法剣士

主人公。ヘラス帝国騎士団長兼第一師団師団長。

帝国の名門ヒュラツセイイン家の当主。階級は中将

通称「飛將軍」インベリアル・ナイトオスマス卿、「大騎士」ナイト、「聖騎士」

ヒュラツセイン家特有の盾を持たない剣術シグムント流の達人であり

卓越した魔法技術を持つ、帝国にその人ありとまでいわれた天才、

最年少14歳で主席総長に上り詰めた。ヴィエラ族人が死ぬのに心を痛める良心をもちあわせている。

マーテル・シルヴィア

19歳・身長178cm クラス：魔法使い

ヒロイン。ヘラス帝国騎士団第二師団師団長、兼治癒師団師団長。階級は少将

通称「戦場の女神」ワルキューレ。ライナの右腕的存在でありライナの恋人。

エルフ族。シルヴィア家は代々皇室付きの魔導士。

誰もが認めるプロモーションと美貌をもっている。

フレン・ダミュロン・ヒュラツセイイン

18歳・身長175cm クラス：魔法剣士

ヘラス帝国騎士団第三師団師団長。ライナの実弟。通称「智略のフレン」。階級は少将

が、少しでも兄に追いつこうとする努力家。肉体派よりも頭脳派だが、

アックアに匹敵する実力者。騎士団の軍師的存在。

ライナ曰く『他国の英雄と渡り合うなら自分の方が上だが、優秀な人材を登用し、国を安定させるならフレンの方が上』

アックア・シヴェント

22歳・身長197cm クラス：槍使い

ヘラス帝国騎士団第五師団師団長。もともとは、帝国内で暴れていた義賊。

通称「神槍のアックア」当時、師団長になったばかりのフレンに討伐され

フレンを気に入り、部下が丸々、騎士団に入り第四師団が設立された。

卓越した槍術の使い手。細かい事にこだわらい豪快な男。

女性にはやさしいが男には何処までも厳しい。シーク族

そのため、第四師団は、全員柄が悪いが弱いものいじめを嫌い女性は極力攻撃しない。

師団内からはアニキと呼ばれている。

ラルゴ

40歳・身長211cm クラス：重僧兵

ヘラス帝国騎士団第四師団師団長。階級は中将 通称「黒獅子ラルゴ」

ヘラス族。騎士団の古株、20年もの間、第三師団の師団長をしてきた

大鎌を携えた黒尽くめの巨漢で、炎を伴った技を得意とする。

本来は正義感が強く優しい性格で、その巨体に見合ったタフさや、

冷静な戦術眼と強靭な精神力を有している

ピオニー・ルグニア・ヘラス

19歳・身長184cm

ヘラス帝国第一皇子。ヘラス帝国の帝位継承権第1位。ライナやマーテルとは幼馴染。

城をよく抜け出し、城下で遊びまわっているが民や兵からは絶大な支持がある。ヘラス族。

皇帝とは思えないほどの砕けた性格だが、一国を治める者としての軍事的策略と決断力は備わっている。とくに統治に関しては天才的手腕で「統治の天才」と称される。

彼自身は腕の立つ格闘家でアッシュに何度も勝負を挑む

クリムゾン・ヘアツォーク・ヘラス

ヘラス帝国第25代皇帝で、帝国の象徴といえる存在。軍事的策略は、ピオニーをも凌ぐ。

用語

ヒュラツセイン家

帝国の公爵家。代々元帥や將軍や師団長を輩出している名門。代々皇家と婚姻関係を結び、準皇家として数えられている（ライナの母は現皇帝の実妹）。

盾を持たない独自の剣術シグムント流を持っている。

ヘラス帝国騎士団

皇族の護衛及び帝国軍の指揮を行なう皇帝直属部隊。近衛師団。

一師団三百人強、総勢千五百人程度が任に就く。

所属するには、騎士学校を卒業か、帝国軍からの編入、師団長の推薦で入隊するしかない。

第一師団

騎士団の筆頭部隊で、騎士団のなかでも選りすぐりの人物が集まる

エリート部隊。

この師団に配属されること自体が、大変な名誉である

#### 第二師団

九割以上が女性で構成する救護部隊。

師団長のマーテルが治癒師団長を兼任する関係柄、

治癒師団と第二師団を兼任する人物がほとんど

#### 第三師団

穏やかな雰囲気の隊風で、常に隊士仲が良く所属兵士の高  
能力

のが特徴の部隊

#### 第四師団

ラルゴが隊長を務めるためか、規律や厳しさが特徴。

#### 第五師団

大半がアックアの義賊時代からの部下のため、好戦的な人物  
がほとんど。

「戦闘専門部隊」の異名を持つ。

モットーが『女性には優しく、男には厳しく』

#### ヴェイエラ族

蒼髪を持つ。寿命は人間の3倍程度で子供のうちは人間と同  
じ成長速度だが、

成人になると以降は容姿が変わらない。

#### エルフ族

耳が尖がっており。

例外なく美しい容貌の持つ（その中でもマーテルは特に飛び  
出ている）

ヴェイエラ族と同じで寿命は人間の3倍程度で子供のうちは人

間と同じ成長速度だ

が、成人になると以降は容姿が変わらない

### シーク族

生まれながらにして白兵戦に特化している種族。動作が俊敏で腕力、体力が高い

### ラストフェンサー

ヒュラツセイン家に伝わる二振りの剣の一つ  
帝国が建国されるときに皇族を守る剣として神より授かったといわれる聖剣。

ヒュラツセイン家当主の証、ライナの愛剣

### ラグクエリオン

ヒュラツセイン家に伝わる二振りの剣の一つ  
1000年以上前に帝国史上最高の刀匠に打たれたといわれる聖剣。

フレンの愛剣

### 熾天覆う七つの円環

ロー・アイアス  
クラティステ・アイギス  
ライナの持つ魔法の中で、もっとも防御力のある防御魔法  
最強防護をも上回る強度。

ライナが、5年の月日を掛け、一から作った魔法。  
展開すると、術者の前に、光で出来た七枚の花弁が展開される。

ト・フゴンプレス  
竜王の殺息をも防ぎきる強度。

### 竜王の殺息

帝国守護聖獣《古龍・龍樹》の放つ最大の攻撃。

ジャック・ラカンのラカン・インパクトさえも上回る一撃。  
熾<sup>ロ</sup>天<sup>アイ</sup>覆<sup>アス</sup>う七つの円環をも、六枚貫くほどの威力

## とある物語の登場人物（後書き）

随時、追加する場合がありますので定期的に見てください

### 3：暗中模索

「オステイア攻略戦が失敗？」

ライナが帰還してから数か月たち

ついに帝国はオステイアへの本格的な攻略を開始した。

『オステイア』に対して帝国は、騎士団を引き連れず帝国軍と鬼神兵を投入。

“黄昏の姫御子”という最大の防御の前に帝国軍は物量で応戦。大量の戦艦と鬼神兵の侵攻の前に『オステイア』はあと一步のところというまで追い詰められ、このまま陥落するかに思われた。

しかし結果は帝国軍の撤退

あと一步というところで何者かの介入で帝国軍の前衛は、スタボロ勝勢は完全に覆され、帝国軍は退却を余儀なくされた。

しかも、報告によるとそれをおこなったのは、たった三人だそうだ。

作戦会議室に入ると帝国軍元帥のマクガヴァンや師団長2人、将校、合計20人ほどが真ん中の開いた丸いテーブルに着席していた。ライナは、マーテルとマクガヴァン元帥の間の椅子に座った

「さてライナ坊やも来た事じゃし、会議を始めるかの」

「マクガヴァン元帥、作戦会議中に、そんなふうに私を呼ばないでいただきたい」

帝国の両輪を担う組織、騎士団と評議会。いや、こつ言い換えてもいいだろう。

武の騎士団、政の評議会。大体において、この両者の関係はあまり良好とは言えない。

建前としては、帝国の臣民資格を持ち、騎士学校を卒業すれば誰でもその一員になれる騎士団。

平民でも成績がよければ帝国側から奨学金が出るほどである、対して、

評議会は完全に特権階級である貴族によって独占されている。

身分的な差異もさることながら、この両者のどちらが帝国の主導権を握るか。

それによって帝国の在り様も大きく変化する。

それだけに多くの利権もからみ、なにかと対立は絶えない。

とは言っても今は、公爵家のライナが騎士団のトップのため評議会はそう簡単に手を出せないでいる。

マクガヴァン元帥は帝国軍の元帥で軍を動かす存在である。  
ライナ自身も尊敬する人である

「話は聞いておるじやろつが、見た方が早いじやろつ」

元帥が自分の前にあるボタンを押すと真ん中に空間、映像が映し出される

戦闘の規模からしてオスティア攻略戦の映像だろう。

精霊砲が周りの森を焼き払いながら塔に到達する

その瞬間精霊砲は、何者かに弾かれるかのように消滅した

映像を見ていた将校から驚きの言葉が漏れる

「あれが、黄昏の姫御子ですか？」

話には聞いていたが恐ろしいな、とライナは思う

「そうじゃ、我ら魔法使いにとっては天敵といってよいじゃろう」  
完全魔法無効化能力」を持つ

ウエスペルタティアの王族に連なる少女じゃ。」

『黄昏の姫御子』アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテ  
オフユシア

それは『人』の名前ではなかった。

それは『道具』の名前だった。

戦争の度に出され、敵の魔法を防ぐ便利な『盾』。

映像が拡大され映像に映し出されるのは  
巨大な魔法陣の上に座らされ、髪をツインテールにまとめ両手を鎖  
で固定されている7歳くらいの少女

戦艦から鬼神兵が投下され、音を立てながら塔に近づき姫御子に手を伸ばした

魔法は消せるが物体は消せないのが『魔法無効化能力』の欠点。

慌てて術師が『防御結界を』と叫ぶのが聞こえたが、間に合わない。

……瞬間、“奴”はあらわれた。

ドンッ！！！

鬼神兵が轟音を立てながら崩れていく。

『そんなガキまでかつぎ出すこたねえ。後は俺に任せときな。』

土煙りの中、見えるのは赤毛を生やした12、3の少年

その少年を見た瞬間ライナの眉毛が一瞬釣り上がった

(あの少年はたしか、報告書でみた……)

いくら強力な魔法力を有する帝国でも負けることはある、

その報告書の中で何度も見た顔。

たかが小さな方面での戦闘だったため評議会がどうでもいいとおもっていたが

ライナはその少年に警戒心を向けていた

部下の中で、諜報活動に長けているものに情報をあてめさせていた

(たしか名は、……)

映像の中で、その姿に術師が叫ぶ。

『お…お前は…紅き翼、千の呪文の…』

赤毛が揺れる。

振り返った顔は少年だった。

(ナギ・スプリングフィールド……)

『そう!!! ナギ・スプリングフィールド!!! またの名をサウザンドマスター!!!』

それからは、一方的だった。“力の暴力”とでも言おうか

赤毛の少年が呪文を唱えれば幾体もの鬼神兵が一度に吹き飛ばされ、剣を持った男性がそれを振るえば戦艦は細切れになり、フードの男が魔法を使えば兵は大地へと這いつくばり横たわる。

またたく間に帝国は勝勢から敗勢へと早変わり

軍が敗走したところで、映像は止まった

会議室は静まり帰った。

そんな沈黙を破ったのはライナだった。

「元帥、彼らの情報は？あるのでしょうか？」

「もちろんある。名は『<sup>アラルブラ</sup>紅き翼』。旧世界の『<sup>AAA</sup>悠久の風』所属の組織じゃ。

構成人数は三人。リーダー格は、『ナギ・スプリングフィールド』、黒髪が『青山詠春』、フードを被っているのが『アルビレオ・イマ』じゃ」

「と、いうことは旧世界出身の？」

「そうじゃな……ライナ、こ奴らの実力はどうじゃ？」

「そうですね。青山詠春とアルビレオ・イマには勝てないことはないのですが。

ナギ・スプリングフィールドとは、……五分五分といったところでしょう。」

「そうか。まあよいじゃろう。……会議は終わりじゃ。退室してもよい。」

その言葉に、したがって退出していく将校達

部屋に残ったのは、ライナ、ラルゴ、マ・テル、マクガヴァン、参謀総長のゼーゼマン。

「まあ、お主たちが残ったのは予想どおりじゃ。」

「元帥にしては、随分簡単に会議を終了しましたからね。」

「さて、ここからが重要じゃ……………2ヶ月後、我等は、グレード＝ブリッジを攻略する」

「「「！」「」」

参謀総長はすでに知っていたらしく驚いていない

「ちょ、ちょっと、まってください！正気ですか！？先日のオステイア攻略の惨敗により

鬼神兵の減少に伴い、兵の士気が下がっているのですよ！無茶です！確かにあそこを手に入れば

王手といつてもいいでしょう！「大規模転移魔法をつかう」…………なるほど、それなら勝率は5割、いえ

8割といつてもいいでしょう。」

基本的に冷静であるライナは、椅子から立ち上がり隣に座っているマクガヴァンに詰め寄る

確かに、メリットもある、メガロメセンブリアとウエスペタリア王国をつなぐ巨大要塞「グレード＝ブリッジ」を陥落させれば王手といつてもいい。

逆にデメリットもある、もし負けることがあればいよいよ帝国は破滅の道を辿ると言っただけではない。

すでにライナの頭の中では、戦闘のシミュレーションが行われていた。

今現在『グレード＝ブリッジ』に配置されている連合軍の数はたった3万、

さらに、勝敗のカギと言っただけいい紅き翼はアララブラどうやらMM元老院に嫌

われているらしく

前線から離れアルギュレーの辺境に追いやられているそうだ。

戦場での起き得る事すべてを考えにいれ、シュミレーションを行なっていく

「わかりました。私は賛成です。」

自分の椅子に深く座るライナ

「そうか。とは言っても陛下がもう決めたことじゃから覆せんじやがな」

「と、そうじゃった、ライナよ少し頼みたいことがあるのじゃが…」

「なんですか、“秘蔵の酒をくれ”とかはなしですよ？」

「なわけないじゃろ、騎士団を使えるお主にしか頼めない」

「なんででしょうか？マグガヴァン様？」

ライナの反対側に座っているマーテルが尋ねる

「いやなに、マーテル嬢、帝国・連合の双方の裏で働いているネズミをな…」



### 3：暗中模索（後書き）

さて気がついた人もいるかもしれませんが、キャラクターの名前はとあるシリーズからとらせていただいています。

#### 4：休息騎士

久しぶり休暇をライナは楽しんでた。

騎士団のトップを務めるライナの忙しさを想像を絶する。

朝5時の起床はもちろん、起きてからのすぐの鍛練、それが終われば政務に追われ、部隊の調練を行ない、食事をとり、夜の12時に就寝その永遠ルート

そんなライナは、今日は、休暇

陛下が暇を与えてくれたのだ。「無茶すぎ」とのこと、

そんなライナの替わりは今頃マーテル、ラルゴ、フレンが行っている。

アックアが手伝わないのは、戦闘バカに政務ができるわけないのだ。アックアは、ライナの替わりに第一師団の調練をしている。

ライナは城下街にきていた。

通路幅は20m、道端には商人達がせつせと働いている。

ライナはいつもの鎧を着ておらず、楽な格好をしている。

泣いている子供を、警邏が相手をしたりと、辺境とは違い帝都は平和そのものだ。

「どーーーーーん!」「ぐお!?!」

いきなり、背中へのダイブを食らい頭から地面へのダイブ

「こんなところで何やってるんじゃ？ライナ」

「そ、その声は、テ、テオドラ様ですね？体当たりをするのならば、せめて勢いを考えてください」

「無理じゃ」「即答ですか!？」

顔をなでながら立ち上がるライナの眼下には、ヘラス族特有の褐色の肌の後頭部から前に伸びた角にまだ幼さを残す顔。ヘラス帝国の第三皇女である。

「それで、近衛兵も連れずに何をなさっておいでですか？」

「城門の前でお主を見かけて追いかけてきたんじゃ」

門兵、何をしている、とライナは思った

「今日は、陛下から休暇をもらったので本屋に……」

「ライナはホントに本の虫じゃな〜」

ライナの趣味は、読書だ。

宮殿内にも一応は書物室はあるが、あそこにあるのはどちらかといえは帝国の歴史に関することのため

ライナの探すものではない

ライナの好きなものといえば、旧世界の書物だ、細かくいえば、アーサー王物語などの騎士道物語が主にだろう。とは言っても、旧世界の書物が亜人の国に出回ることとはほとんどない。

いまからアツシユが訪れる店は、そんな書物を扱っている珍しい本屋である。

「とりあえずは、テオドラ様を宮殿まで送るので行きましょう」

「いやじゃ、宮殿にいてもつまらん！ライナについて行く！」

「あのですね。無茶いわないでください。テオドラ様がいなくなつたと知つたらどうするのですか？」

「門兵には、出かけるように言つといたからだいじょうぶじゃ、あ奴らも『騎士団長ナイトリーダーがご一緒なら大丈夫でしょう』と言っておつたし」

貴様ら、後日地獄のトレーニング決定だ！、とライナは門兵に激怒していた。

「はあ、わかりました。離れずついてきてください。テオドラ様に何かあれば私が陛下に会わせる顔がありません。」

書物の物色を終え、カフェで昼食を澄まし、夕方まで街を歩いてい

たアツシユは、邸に帰っていた。  
じゃじゃ馬姫は、夕方になる前に寝てしまいおんぶしてライナが宮  
殿まで連れて行った

宮殿の敷地内にあるヒュラツセイン邸は、帝都で宮殿の次に大きな  
邸である。

そんな自分の自室にライナはいた。

公爵の部屋にもなると普通は豪華絢爛の部屋なのだがそんなことは  
なく、置かれている家具やなんかは

落ち着いた雰囲気でライナの趣味で選んだってよくわかる

必要最低限のものしか私室には置いていないのだろう  
意外なほど物は少なく、整理整頓されていた。

部屋に二つしかない椅子に座り、ライナは一人で酒をのんでいた。  
窓からは、光輝く星が輝いている。

グラスに蒸留酒を自分で接ぎ、カラン、と氷が啜うような音を立て  
る。

ライナは手の中でグラスを回し、その音を楽しんだ。

戦争が始まってすでに一年、多くの人が死んでいった。

国を支えるといつていい民、顔も会わせたこともない敵兵

部下多くが死んでいった。そのたびにライナは、涙を流してきた。

それでも帝国のために戦うそれがヒュラツセインに生まれた者の宿  
命。

『泣いても変わらない。感情を律することができなければ兵士とし  
て失格だ。』

昔から、父親に言われてきた言葉だ。

だからこそ、感情を殺して戦場に立つ。泣くならば戦場の外で泣く。今までも、今も、これからも……

「ライナ？いますか？」

ふいに扉が叩かれて、厚い木のその向こうから、そうマーテルの声がした

「マーテルか、入っていいぞ」

「失礼するわ」

扉を開け、入ってきたのは、ライナの大切な人であり、自分の右腕と言ってもいい人

マロンペーストを思わせる長い髪は銀に輝き、サファイアブルーの瞳がライナを見つめる

部屋に入ったマーテルは、椅子を寄せライナの隣に座った。

「一人でさびしく、酒盛りですか？」

「いいではないか。久しぶりの休暇なのだから。」

隣に座ったマーテルは、自分の頭をライナの肩に預けた。

マーテルの髪が、ライナの鼻をくすぐる

机に置いてあった蒸留酒をマーテルが手に取り

「酌をどうぞ」

「……………ありがとう」

ライナはグラスを傾けた。

氷が詠うように鳴り、喉を酒が熱く滑り落ちていく。

「こっやって二人でゆっくりするのは久しぶりだな。」

「今お気付きで？ライナは女心がわかっていません。」

「悪い悪い。」

鼻同士が10cmの間隔で近づいていた二人は、自然にキスを交わした。

触れるだけのキスだが、数分にも、数時間にも感じられた。

そのまま、ライナはマーテルを引き寄せた。

「随分と積極的ですね」

「酔ってるんだ、すこしくらい甘く見てくれ」

そのまま夜が明けるまで、お互いにお互いの存在を感じ合うように、何度もお互いを求め合った。

#### 4：休息騎士（後書き）

あまりいい雰囲気のときの文章が苦手なんですけど許してください

## 5：猛勇剣舞（前書き）

遅れてすみません。

自分あまり戦闘シーンが得意ではないのです。

## 5：猛勇剣舞

会議から2ヶ月後、帝国はついに作戦を開始した、ことわざで『壁に耳あり、障子に目あり』というように、何処に連合の間諜がいるかわからないため一般将校にさえ知らされていなかった作戦は成功。

第二師団師団長フレンを総大将とした、軍は帝都ヘラスからの、大規模転移魔法を用いての強襲攻撃は、功を奏し、相手は大した抵抗もできずに『グレード』ブリッジ』を放棄し、帝国は、『グレード』ブリッジ』を陥落し、『オスティア』へ王手を果たした。

しかし、連合はそんな状況を黙っていなかった。

「およそ、五日ですね。」

「ああ、五日だ。」

緊急軍議として、召喚命令で謁見の間へ赴いたライナに待っていたのは、

連合の新たな動きの報告、斥候曰く、「連合は『トリスタン』に軍勢を招集」とのこと。

今、この状況で『トリスタン』への軍勢の招集する意味は

巨大要塞『グレード＝ブリッジ』の奪還

帝国は、この報告に対して即座に行動を起こした。

兵糧と兵站の準備、軍編成、e t c……

そして、ライナを総大将とした軍隊を『グレード＝ブリッジ』へと差し向けた。

「爽快な景色ではないか」

「何処がですか？兄上」

4日後、軍を連れて『グレード＝ブリッジ』に訪れたライナを待っていたのは、  
ものすごい数の連合の戦艦。

「さて、軍議を始めるが」

『グレード＝ブリッジ』の中枢司令区による軍議

机の上には、戦場の地図。

机を囲んで、師団長や将校が立つ。

「さて、相手の兵数は、約30万、対してこちらは、約28万この  
辺は対して問題ではない」

相手の戦艦は、250艦こちらは200艦、対して我々には『グ  
レード＝ブリッジ』という要塞がある。

50艦の差は、十分覆せる。問題は

奴らだ。」

机の上に映し出されるのは、今現在帝国がもつとも危険視している  
組織、<sup>アラルブラ</sup>紅き翼

「オステイアでの戦闘後、奴らに新たなメンバーが確認された。名  
は、ゼクト、名前以外の一切の

経歴の不明な人物。そしてジャック・ラカン。評議会が、奴らを  
消すために差し向けたらしいが

いつの間にか奴らと行動を共にしているようだ。……厄介な事を  
してくれる。」

兵法では、攻城戦では、攻める側は守る側の兵力の三倍の兵力がい  
るのが定石である。

そう簡単には、落とされることはないだろう。

しかし、そんな考えを覆せる奴らがいる。<sup>アラルブラ</sup>紅き翼である。

一騎当千      それは彼らのためにある言葉といって過言ではな  
い。

静かに話を聞く将校達

「主な部隊や旅団は、司令部のある区画や動力部の護衛を命じる

そして我々師団長は

奴らの首を捕る」

とは言っても、ライナ達師団長には、できるだけ撤退の許可が降

りている。

いまここで、貴重な戦力を減らしたくない配慮である。

「……帝国に勝利を！！」

「「「「「「「「「「帝国に勝利を！！」「「「「「「「「

「私が、ナギ・スプリングフィールド。マーテルが、アルビレオ・イマ。フレンがゼクト。

ラルゴは、ジャック・ラカン。アックアが、青山詠春。ああは言  
つたが、私達の目的は

奴らの足止めだ。深追いはするなよ？特にアックア」

どちらが早く司令部を落とすか。

「どうして、俺だけ名指しなんだよ！」

「言わないとわからんか?」「言わないと分かりませんか?」

「……皆、嫌いだ」

『グレード＝ブリッジ』の屋上に帝国軍、騎士団、約20万が並ぶ。  
いまから、ライナが出陣の号令を行なうためである。

『グレード＝ブリッジ』内にいる兵士たちにも聞こえるようにしてある。

「勇敢なる帝国の兵たちよ!いよいよ我らの戦いを始める時が来た  
!」

剣を抜き放ち、前方へと驕かさしながら兵達へと語りかける。

「敵は強大だ!だが兵達よ! 恐れるな!」

「敵に立ち向かう勇気を！ 敵をねじ伏せる剛毅を！

勇敢なる将兵よ！ その猛き心を！ その誇り高き振る舞いを！  
その勇武なる姿を我に示せ！」

「後ろを振り向くな！我が屍を越えて行け！この戦いを制するのだ  
！」

「武器を取れっ！剣を振るえっ！天命は我ら帝国にあり！」

号令とともにすさまじい歓声があがる。

「「「「「うおおおおおおお~~~~~」」」」」

「全軍、突撃せよ！！」

巨大な戦艦がひしめき合い、砲塔が次々と火を噴く。  
空中で兵士たちが、肉体をもって斬り合い、突き合う。  
魔法使いウイザードの術が発動し、炎が、水が、雷が、風が、氷が、襲いかかり、  
兵士の命を散らしていく。

爆発音、悲鳴、魔法兵器の機械音　それらが交じり合い、『ゲ  
レード＝ブリッジ』そのものが苦悶し、  
唸りを上げているかのようにも聞こえる

「ふっ！」

杖にまたがりランスを構える魔法使いを、下からすくい上げるように  
斬りつける。

肉と骨を断つ感覚が腕に伝わってくる。  
兵はおそらく即死だろう。声も上げなかった。

周辺にいた部下は、戦場の中で別れてしまった。  
あれでも、自分が鍛え上げた部下である。  
そう簡単には死なないだろう。  
ライナはそう自分に言い聞かせた。

前方にいる空中母艦は、ライナの存在に気がついたのか、魔法障壁  
を展開するが  
ラストフェンサーで容易に障壁を切り捨て甲板に降り立つ。

戦艦の砲塔が一斉にライナに向けられた。  
光が集中し、一斉攻撃がライナに向けて放たれ

『クラティステール・アイギス  
最強防護』

無数の魔法陣が受け止めた

煙が晴れ、ライナは、腰だめに剣を構えていた。

それを一気に前に向かって突き出した

「  
光龍槍！」

魔力が光の槍となつて打ち出され、艦橋を貫ぬき  
そのまま、光の槍は虚空を突きぬけ戦艦の後方の巡洋艦をも貫いて  
いった

火を噴き、音を立てて撃沈していった。

そのとき、ライナに通信が入った。

『騎士団長！アラルブラ紅き翼の場所を捕らえました！』

司令部からの通信からだろう。  
背後では、兵士の声が絶え間なく聞こえてくる。

「何処だ？」

『C 5の地点です！』

「ここから、南南東に2？の距離か 他者には？」

『既に連絡済みです！では、御武運を！』ブツン！

音を立てて通信が終わった。

「さて、待っている。千の呪文の男サウザンド・マスター」

「流石に、数が多いですね！」

アルビレオ・イマは、重力魔法で相手を潰していた

「弱くても、数が増えれば、めんどくせえなあ！」

となりでは、最近仲間になった男　ジャック・ラカンが、自分のアーティファクトホ・ヘイロース・メタ・キサロゾーグーンの顔を持つ英雄を、相手に向けて絶え間なくぶん投げている

「どうする?!分かれて移動するか?!」

メンバーの中で唯一、常識人である青山詠春は、近づいてくる騎士を切り捨てる

「その方が良いじゃろう！」

「おっしやあ!なら俺が一番乗りだあ！」

見た目に対して、年寄りくさい話し方をするのは、ゼクト、“赤毛”が師匠と呼んでいる子供である。

しかし、ライナは、この子供が数百年生きている人物だと考えている。

そして、その子供に答えたのが紅き翼アラルプラのリーダー、ナギ・スプリングフィールド。

ウエニアント・スピリトゥス  
「来たれ雷精、

アエリアレス・フルグリエンテース

風の精!!!

クム・フルグラーティオーニフレット・テンベスタース

雷を纏いて 吹きすさべ

アウストリーナ

南洋の風

ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス

雷の暴風!!!」

『一般の魔法使い』の『雷の暴風』とは威力が桁違いの『雷の暴風』は、前方の帝国兵を薙ぎ払うために  
前進し

「熾ロー・アイアス天覆う七つの円環」

七枚の赤い花弁に受け止められた。

「「「「「なっ?!」「「「「「

自他共に認める、桁違いの威力を受け止められたことに驚きを隠せない紅き翼

「恐れ入った。『雷の暴風』で、一枚、ヒビが入るとは」

熾ロー・アイアス天覆う七つの円環      古龍・龍樹の一撃『ドラムンフレス竜王の殺息』  
を一枚残して防ぐほどのライナの防御魔法の中で最大の魔法である。

まさか、『雷の暴風』でヒビが入るとは思わなかったようだ

爆発の際に起きた煙を、払うかのようにローレイの剣を、薙ぎ払う。

煙からでてきたのは、ところどころに返り血を浴びた純白の鎧を着たライナ

「負傷者は、治療師団に治してもらえ」

背後にいた負傷した部下に話しかけるライナ

「ここは、お願いします。ナイトリーダー騎士団長」

負傷した第一師団の部下に肩を貸して、部下は瞬動で要塞に向かっ

ていった。

「てめえ、一体何者だ?!」

「ヘラス帝国騎士団主席総長、ライナ・シデス・ヒュラッセイン。」

「!あなたが?」

隣にいる、アルに視線を送るナギ

「アル、知ってんのか?」

「帝国が誇る精鋭部隊『帝国騎士団』の総長です。」

「一番、強い奴ってわけか?」

「一番気になるのはそこですか?と少し呆れ顔をするアル

「御話中、申し訳ないが、後ろに気をつけたまえ」

その瞬間

「  
かりゅうそう  
火竜爪！」

巨大な鎌の刃が、紅き翼の胸を薙ぎにかかった

「「「「「つ!?!」「」「」「」

紅き翼は、とつさに避け散開する。

炎をまとった鎌に少しかすり、服が少し焼ける匂いがする。

「ライナ、教えてしまつては奇襲ではないぞ」

「私として、奇襲というのは、我が流儀に反する。」

「あぶねえ！もう少しで丸焦げだったじゃねえか?!」

「あの奇襲を避けるとは、アックアと同類の馬鹿か？」

詠春、アル、ゼクトは、常に警戒していたため、認識して避けたが警戒を解いていたナギとラカンは、野生の勘というやつでよけた。た。

そんなことが、騎士団でできるのは、アックアくらいである。

「アックア？誰だそれ？」

「アックア、つてのは！俺のこつた！！」

アホらしく縮地で登場したのが紅の槍を携えたアックア

詠春 「（あつ、こいつ、ナギやラカンと同じタイプの奴だ）」

アル 「（あつ、彼、ナギやラカンと同じタイプですね）」

ゼクト 「（あつ、こやつ、ナギやラカンと同じタイプの奴じゃ）」

奇しくも、詠春、アル、ゼクトは、心の中で声をそろえて呟いた。

「やっと、捕捉できました。」

上空から、マーテルが降りてきた。

そして

「みつけましたよ。アラルブラ紅き翼」

フレンが到着し

ここに、全ての師団長が集結した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8852q/>

---

帝国の聖騎士

2011年8月27日13時19分発行